

# 國學院大學學術情報リポジトリ

オカルト番組をめぐるメディア言説：  
〈オカルト〉の成立および〈スピリチュアル〉へ至  
る変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅, 直子, Suga, Naoko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002449">https://doi.org/10.57529/00002449</a>

## オカルト番組をめぐるメディア言説

### — 〈オカルト〉の成立および〈スピリチュアル〉へ至る変遷—

本論は、オカルト番組をめぐるマス・メディアに表出する言説を対象に、送り手（放送局・制作者）が超自然的・非科学的あるいは宗教的諸現象をオカルト番組としてエンターテインメント化する論理と、受け手（視聴者）がオカルト番組における超自然的・非科学的あるいは宗教的諸現象をエンターテインメントとして受容する論理を分析・検討することによって、オカルト番組を介したマス・コミュニケーション（送り手と受け手の相互作用）の変遷を捉えることを目的とする。

本論において「オカルト番組」とは、超能力（者）、霊能力（者）、超常現象、心霊・怪奇現象、未確認飛行物体（UFO）、未確認生命体（UMA）など、超自然的現象を企画の中心となる出し物とし、かつ、その真偽を積極的に曖昧にする傾向性のテレビ番組をいう。

オカルト *occult* とは、「覆う」という意のラテン語に由来し、「隠す」「故意に隠されている」、ひいては「通常の知覚力では捉えられない」「神秘的」という意味が含まれる言葉であるが、文化人類学者の金子毅が指摘したように、日本において「オカルト」という言葉は「不可思議で超自然的な現象や作用の総称」と捉えられている。それは「オカルト本来の意味とは完全にかき離れた、いわば日本化されたオカルト」である。本論では、この「日本化されたオカルト」を念頭に置き、〈オカルト〉と表記する。オカルト番組は〈オカルト〉を出し物とするのであるが、オカルトを日本化することに最大の役割を果たしたのもまたオカルト番組であったことは論を俟たない。オカルト番組は、ときに批判・批難（バッシング）されながらも支持（視聴率）を獲得して受容（放送）され続け、およそ半世紀の歴史がある。

本論が、オカルト番組の内容（出し物となる〈オカルト〉）ではなく、オカルト番組をめぐるマス・メディアに表出した言説に注目するのは、公共性の高いテレビというメディアにオカルト番組が存在し続けた事由にこそ、問題関心があるからである。オカルト番組をめぐるメディア言説の変遷をたどる作業は、オカルト番組を介したマス・コミュニケーションの変化を明らかにする。その変化の意味から見えてくるのは、現代の日本社会にとって不可避な宗教問題の一側面であり、それを照らし出し得るところに本論の意義がある。

本論は、1 - 2 章でオカルト番組を成立させたマス・コミュニケーションについて検討し、3 - 4 章でオカルト番組成立以前における心霊術のメディア・フレームについて検討する。

そして5-6章において、オカルト番組成立から2000年代のスピリチュアルブームに至るメディア言説の変遷を捉え、結論として現在、オカルト番組の存続がきわめて困難な状況にあることを論じる。以下、各章を要約する。

第1章（テレビと「宗教」—オカルト番組を捉える視座—）は、日本人の宗教観および宗教番組に関する先行研究をもとに、テレビというメディアで「宗教」が規制され（オカルト）が許容される論理に〈宗教＝私〉〈放送＝公〉という見方があることを明らかにする。

阿部美哉は宗教放送（教団提供の番組）に関する調査・分析によって、①日本では宗教放送に対して厳しい自主規制があり、これが宗教をテレビから排除する仕組みとして作用していること ②その背景には、宗教は基本的に私的な問題であり、私的な宗教は公的な放送に適さないとの考え方があることを指摘した。宗教を「私的な問題」と限定的に捉える見方には、中村元が指摘した「伝統的な観念」の影響が考えられる。

「宗教」という言葉は英語で **religion** の訳語であるが、この訳語「宗教」について考察して中村は、「日本人が「宗教」という語を用いて論議する場合に、知識人ならば、それは **religion** のことであるとして、西洋を基準として考えるであろうが、日本人乃至東南アジア人のあいだでは、伝統的な観念である「宗」「教」ならびに「宗教」に無意識のうちに影響されているという場合も考えられる。その場合には、西洋のリリジヤンの観念との間にギャップの起こることも考えられる」と指摘した。日本人ないし東南アジア人のあいだで伝統的な観念である「宗」「教」および「宗教」は、中村によれば特に仏教的な概念であり、「宗」というのは究極の真理で、言葉で表現することができないし、規定することもできない、つまり究極のものであって、言語表現を超えたものである。ところが、それを人に伝えるためには言語に頼らざるを得ない。そのための教え、または説明が「教」となるわけである。したがって、説かれ得ない面と、説く面の両面をあらわして「宗教」という言葉が成立したのである」。一方、ヨーロッパ諸国で **religion** というときには、同じ信仰をいなく人々の集団、社会的行動様式、習俗などを内含して言い、これに対して個人の宗教的自由を意味するときには「信仰 (**croynance, Glaube**) の自由」として主張される。

たとえば、**religion** を基準とすれば、初詣や合格祈願は宗教行動である。しかし、伝統的な観念である「宗教」を基準とすれば、一般に初詣や合格祈願で「教」を説かれる場面はなく、宗教行動とは認識されない。実際、日常生活において初詣や合格祈願が「宗教」と言表されることは稀である。ニュース番組で地方の祭礼や年中行事が紹介される場合も、

「伝統(行事)」「神事」「(古くからの)信仰」という言葉が用いられるのに比して、「宗教」の語が用いられることは少ない。(本論では、伝統的な観念／仏教的な概念にもとづく「宗教」を religion の訳語である宗教と区別して、「」を付す)

宗教を専ら個人の信仰や宗教団体と捉えればこそ、〈宗教＝私〉〈放送＝公〉という見方が成り立ち、〈放送＝公〉に「宗教」はなじまないという認識が生じる。そして、「宗教」に対する厳しい自主規制が「宗教をテレビから排除する仕組み」となる。つまり、〈宗教＝私〉〈放送＝公〉の前提が「宗教」を規制・排除する根拠の役割を担っていると考えられる。

一方、この前提は、非「宗教」と見なされ得る〈オカルト〉を規制・排除しない。井門富二夫によれば、テレビが本格的に普及しはじめた当時、送り手(放送局・制作者)は「超常現象もの」を宗教放送とは認識していなかった。〈オカルト〉は、超自然的(精神的／霊的)な力(作用)に対する大衆の関心に呼応する宗教性を有するが、非「宗教」とされるため、その宗教的内容は規制されることなくテレビに映し出されることになるのである。

第2章(何故オカルト番組は成立したのか?—オカルト番組の成立条件—)は、オカルト番組が成立した当時のマス・コミュニケーション状況を検討し、オカルト番組の成立を可能にした条件として、次に仮説を導く。すなわち、オカルト番組は「お遊び」「お座興程度」の〈信じられ方〉をする(と思われる)ところに成立したのであり、オカルト番組の存在が社会的に許容される理由もまた、この前提にある。

オカルト番組は1960年代後半(昭和40年代)から放送されるようになるが、本論ではオカルト番組の成立を1974年(昭和49)と捉える。1974年にオカルト番組が成立したとする理由は、超能力・オカルトがブームとなった1973-74年に「オカルト」という言葉が人口に膾炙したから、あるいは『木曜スペシャル』に出演したユリ・ゲラーのスプーン曲げが一世を風靡したから、というようなことではない。その理由は、超能力を出し物とする数多の番組が放送された1974年を経た翌1975年(昭和50)1月に、民放連が「放送基準」を改正し、新たに「催眠術、心霊術などを取り扱う場合は、児童および青少年に安易な模倣をさせないよう特に注意する」と定めたことによる。つまり、テレビ(放送局)は心霊術や念力などの〈オカルト〉を「安易な模倣を助長しないよう注意」して制作・放送することにした。この事実を以って、テレビ番組中の1ジャンルとしてオカルト番組が成立したと捉えるのである。

民放連は1958年(昭和33)「テレビ放送基準」制定以来、「放送基準」に「迷信は肯定

的に取り扱わない」ことを定めているが、〈迷信〉の内容を具体的に規定し、それによって規制するものでない。放送において許容される〈迷信〉の内容や「肯定的」と解釈される範囲は、送り手（放送局・制作者）の判断と受け手（視聴者）の反応によって変化する。

1974年当時、オカルト番組の制作者は雑誌（『週刊朝日』）の取材に応じて「ホント？ウソ？と目くじらをたてて騒ぐのはいいんですが、そんなことよりも『現代最後のロマン』というとり方をしてほしいですね」と語った。こうしたコメントに批判は起こらなかった。

岸本英夫が指摘したように、そもそも、〈迷信〉を正信から区別する客観的な絶対的基準というものは存在しない。ゆえに、社会の安寧や個人の生活に実害があるか否かが問題となる。ある〈迷信〉に実害があるか否かは、概して社会／個人への影響力によって判断される。狂信的・盲信的な依存は〈迷信〉とされる。また、〈常識〉によって〈迷信〉と見做されることも「お座興程度」「笑いこけさせる位」（真に受けられない）ならば、「真剣になってお相手するのも大人気ない」といった反応が引き起こされる。つまり、〈迷信〉の影響力とは、信じられる程度と換言可能である。「お遊び」「お座興程度」の〈信じられ方〉をすればこそ、オカルト番組は許容されるのである。

第3章（心霊術をめぐるメディア言説—1950 - 60年代のエクトプラズム—）は、1950 - 60年代における心霊術をめぐる雑誌メディアの言説を分析する。

週刊誌ブームとテレビの普及期にあった昭和30年代、送り手（マス・メディア）は受け手（読者・視聴者）を心霊現象は詐術か錯覚と一笑に付す〈常識〉をもつものと位置付けることによって、心霊術をめぐる論争をも見世物（見物対象）とするメディア・フレームを形成していった。それは心霊術が孕んでいた諸問題を捨象すると同時に、見物への欲求を拡大再生産する流れの起点と見做すことができる。

1960年代後半（昭和40年代）に至って、心霊術をめぐる雑誌（週刊誌）メディアの言説にセンセーショナリズムの進展が認められる。送り手（『女性自身』）は、霊媒の真偽／詐術の有無を不問として、受け手（読者・あなた）に「招霊実験」という非日常的な現場を覗き見させるようになる。心霊現象は詐術か錯覚と一笑に付すのが現代の〈常識〉であるから、覗き見る世界には〈常識〉からの逸脱が期待される／期待されるであろうと予想される傾向が生じる。ここに〈オカルト〉のセンセーショナリズムが進展するのである。

第4章（オカルト番組のはじまり—1968年の「心霊手術」放送—）は、1968年11月

14日に放送された『万国びっくりショー』（フジテレビ）の「特集・フィリピンの心霊手術」（以下、「心霊手術」）を事例として、オカルト番組成立以前のマス・コミュニケーション状況について検討する。

「心霊手術」は、フジテレビ広報部によれば、「それがインチキかどうかというのは別問題」（真偽はともかく）として、「こういう手術法もある」（とにかく〈見もの〉）と放送したというが、視聴者の反応は〈オカルト〉を〈見もの〉とするメディア・フレームを了解していたとは言い難い状況であったといえる。たとえば、視聴者（医師）から「あのテレビを見ていたわれわれ医師は、一笑に付し、私が憤慨することすら、大人げないというが、これでは一般の人たちへの影響があまりにも大きく、非常な実害を伴う恐れがある」と懸念が示された。実際、放送された「心霊手術」は、出演者の談話によって術師トニーの超能力が裏付けられる構成であり、心霊術に対して一切の疑義を呈していない。にもかかわらず放送に至った要因には、番組の〈見世物〉的要素に加え、〈海外〉の話題であることの気安さのようなものがあつたのではないかと推察される。日常生活から遠く離れた〈海外〉の情景はフィクショナルであり、外国人もまたフィクショナルな存在であつた。

真偽はともかくとして〈見もの〉と呈示することを可能とするメディア・フレーム形成のキーとなるのは、出し物となる超自然的・非科学的な事柄を真に受けず、真偽をとやかく言わず、とにかく〈見もの〉として受けとめる視聴者（像）である。この視聴者（像）を顕在化させていくことによって、送り手（放送局・制作者）は、〈見もの〉であれば放送できるマス・コミュニケーションを前提として、〈オカルト〉の真偽の判断から自らを解放した。ここから、オカルト番組は飛躍的に放送頻度を増してゆく。

第5章（オカルト番組の成立と展開—1970 - 1980年代のオカルト番組—）は、番組内で〈オカルト〉を（真に受けず〈見もの〉とする）〈半信半疑〉に位置づける構成（言説）に着目して、1970年代および1980年代のオカルト番組をめぐるメディア言説の変化について、以下のように捉える。

オカルト番組は、必然的にヤラセが行われる。番組にヤラセがあつたとしても、それが視聴者にも認識されていたとしても、ヤラセ批判が起こるとは限らない。ヤラセが批判されるのは、「視聴者が映像を含めてその部分を真実であるととらえているのに、『じつはそうではなかった』という送り手と受け手のコミュニケーションギャップがある限界を越え、その原因が送り手側にあるとき」である。超能力番組に対してヤラセ批判が起こらなかつ

た要因は、①〈オカルト〉＝「(現代最後の) ロマン」という見方が概ね受け入れられていたこと、②「家族揃ってフィクショナルなテレビ世界を楽しむ」という視聴スタイルがかるうじて保持されていたこと、の2点と考えられる。ヤラセ批判は〈視聴者共同体〉の動揺と深く関わっており、テレビ批判としてヤラセが言説的に有効なリソースとして人口に膾炙していく土壌が生まれたのは、1970年代末から80年代はじめにかけてであった。

したがって、大衆願望（「現代最後のロマン」）をフィクショナルに演出するオカルト番組の成立を可能にした〈視聴者共同体〉は、オカルト番組成立以降、揺らぎ始める。家族視聴から個人視聴へとシフトしていくなか、「視聴者を「アッ」と言わせよう」という路線を突き進んだ〈オカルト〉を含むスペシャル番組（特番）は、ヤラセが公然の秘密となる。

1980年代以降、「視聴者」は「素朴な受け手であることをやめて、「笑い」を積極的に構成する担い手、「笑い」を評価すると同時にそれをみずから方向づけ、最終的には生産してさえいくような担い手になっていく」。つまり、「ツッコミ」を入れる＝「笑い」を発見する視線をもつようになる。ツッコミを入れる視聴者は、番組内の矛盾を糾弾するわけではなく、「笑い」というかたちで承認する。それは、別の角度から見れば、真実と虚構の区別を積極的に曖昧にする存在である。

「お遊び」「お座興程度」の〈信じられ方〉をする（と思われる）ところに成立したオカルト番組にとって、ツッコミを入れる視聴者が想定されるという事態は、オカルト番組に新たな変化を引き起こす。ツッコミを入れる視聴者は、真実と虚構の区別が積極的に曖昧にされることを承認するため、何が、どこまでが「シャレ」（演出）なのか、わからなくなっていくのである。

1974年の超能力番組の内部にあった〈半信半疑〉は、人びとが超能力（潜在能力というロマン）に抱いた〈半信半疑〉そのものだったのに対して、1980年代のオカルト番組が内部に構築する〈半信半疑〉は、あくまでオカルト番組という枠組において、真実と虚構の区別が積極的に曖昧にされることで成り立つ。別言すれば、〈オカルト〉の「ロマン」「謎」を保持するため、〈オカルト〉を否定せず、かつ肯定的見解を直接的に否定しない傾向が生じたのである。同時に、〈オカルト〉の真偽を問う姿勢や真実や現実を追求するという感覚は、後景に退いていく。

第6章（霊能者をめぐるメディア言説—1990年代・2000年代の比較分析—）は、1990年代に活躍した宜保愛子をめぐるメディア言説および出演番組と2000年代に活躍した江

原啓之をめぐるメディア言説および出演番組を分析・比較し、〈スピリチュアル〉番組（「スピリチュアル」と称され、それまでのオカルト番組とは異なる印象を与える構成の番組）と〈オカルト〉番組（〈スピリチュアル〉番組と認識されないオカルト番組）の相違を明らかにし、以下のように〈スピリチュアル〉番組によってもたらされた問題を指摘する。

〈オカルト〉番組では、〈オカルト〉が「謎」「ロマン」として表象される。〈オカルト〉をエンターテインメントとするには、真偽を留保した〈オカルト〉（「謎」「ロマン」）に対して「お遊び」「お座興程度」の〈信じられ方〉をする（と思われる）ことが条件であった。宜保特番はこの延長線上に位置していた。しかし、〈スピリチュアル〉番組である江原特番では、〈オカルト〉（霊視・占い）がエンターテインメント（〈感動〉の物語）とされる。このとき、〈オカルト〉（霊視・占い）は〈感動〉の触媒であり、一切否定されない。「ドキュメンタリーバラエティ」に潜在するゲームの枠組によって、虚実・真偽は曖昧なまま視聴者に投げ出される。その曖昧さを受け入れることが、視聴者に求められる。

したがって、〈スピリチュアル〉番組の場合、霊視・占いが否定されず肯定的に取り上げられることが許容される条件として、〈信じられ方〉では対応できない。〈スピリチュアル〉番組は、霊視・占いの真偽を問題としていないため、〈オカルト〉番組のように〈信じられ方〉がエンターテインメント性を担保する条件にはなり得ない。〈スピリチュアル〉番組は、オカルト番組の命脈であった〈半信半疑〉を放棄し、〈感動〉という新たな問題をもたらしたのである。

以上、オカルト番組の成立から今日に至る変遷を捉える本論の視点からは、オカルト番組は現在、その存続がきわめて困難な状況にあると観察される。この状況は、視聴者のリテラシーやクリティカル・シンキングの向上によって、あるいは、繰り返された番組批判によって、制作されなくなったというようなことではなく、オカルト番組を成立・展開させてきた前提が大きく揺らいでいることによって生じたのである。

オカルト番組がエンターテインメントとして許容されるマス・コミュニケーションには、送り手（制作者・放送局）と受け手（視聴者）の共犯関係が必要不可欠である。〈スピリチュアル〉登場以前のオカルト番組の核心には、この共犯関係がある。成立後から 1990 年代までのオカルト番組に対して、保護者や学者や週刊誌が抗議・批難することはあっても、視聴者によって批判・批難が主導されることはなかった。視聴者 **audience** はオカルト番組の〈オカルト〉（見せ物）に真偽を追究するようなことはしないと見做されていた。



1980年代のオカルト番組は、成熟した視聴者との共犯関係によって、オカルト番組という枠組において〈オカルト〉を積極的に肯定することで〈半信半疑〉が演出された。その誇張された期待感は、1974年のオカルト番組のパロディとして受容されていた（と思われる）と観察される。パロディとして見られるかぎり、〈オカルト〉を「遊ぶ」ノリが視聴者に「共有されているはずだという確信めいたもの」が想定される。ただし、ここで想像される〈視聴者共同体〉は、かつてのようなマス mass の空間ではなく、内輪ウケ private の空間に想定される。パロディは昂じると、あるいはオリジナルが忘却されると、「自立したパロディ」になる。

1990年代、オカルト番組はその内部に〈半信半疑〉を構築できなくなっていた。1980年代に流行したニューサイエンスは、1970年代に表層的な断片（UFO、超能力、心霊現象、予言、ホラー映画など）の集積として顕在化しながら必ずしも相互に関係しているというわけではなかった〈オカルト〉をつなぐ理論的基盤となり、1970年代のオカルトブームと1990年代の「精神世界」ブームを接続したが、両者の間にはギャップがある。たとえば、1970年代は、「宇宙人は存在するか否か」という問題設定が有効であったが、1990年代には、宇宙人の存在を信じる人びとの間で宇宙人の有無をめぐる問題設定自体が無効化し、後退・忘却されていた。

2000年代のスピリチュアルブーム批判でよくいわれたことの一つは、エハラーと呼ばれた女性たちが、「日常的に」「ごくあたり前に」前世や守護霊について語るということへの違和感・反感であった。実際、霊視・前世・守護霊などの真偽／有無をめぐる問題設定自体が無効化していることは、驚くべきことである。オカルト番組は〈スピリチュアル〉番組に至って、オカルト番組というジャンルを越えて宗教番組の領域に横滑りしていたのである。テレビというメディアで宗教をどのように表象するかという問題は、現代日本社会にとって不可避な宗教問題の一つである。